

『ワイルド・スワン』の世界

The World of “Wild Swans”

佐々木 涇
SASAKI Thoru

はじめに

中国人女性、張戎^{チアソジュン}氏が、イギリスに留学し、そのまま滞英して『ワイルド・スワン』をロンドンで出版したのが1991年、日本での初版がその翌年である。これらの日付け以来何人の人々がこの本を読んだことだろう。とりわけ、いわゆる西側の欧米、日本では高い関心をもって中国の内情を知りたいとする多くの人が読んだにちがいない。単にそれだけであるならば、版を重ねることは、むしろあり得ない。読む人になんらかの感動を与え、事実でありながら悲惨な印象を余り与えることなく、読み終えたときにほっとさせる。このような思いを与えるからこそ、「おもしろさ」と「読むことの楽しさ」が口にされ、多くの人に伝えられ、読もうとする人をさらに生みだすのだろう。筆者もその一人である。

しかし、読み終えた今、このまま放っておくことはできない。この作品の「読ませる力」は何であるか探らざるを得ない思いにかられている。ノンフィクションに文学性はあると考えてはいるが、この作品の場合、原文は英語である。表現手段の言語である英語がゆえにより、完成された芸術性を追求することは筆者にとって不可能である。しかし、このこと以外で文学としての芸術性を満たすものを探ることは可能であろう。したがって、土屋京子氏の訳による講談社発行の『ワイルド・スワン』上下二巻を研究対象とした。

I あらすじ——波乱の日々八十年——

『ワイルド・スワン』上下二巻は二十八章とエピローグで構成されている。各章は、たとえば第一章では「三寸金蓮」——軍閥將軍の妾——(1909

年～1933年)、第二章は「ただの水だっておいしいわ」——夏先生との再婚——(1933年～1938年)のように見出しと描かれた時代がわかるようにつけられている。ちなみに最終章は、「翼をこの手に(1976年～1978年)」となっている。言い換えれば『ワイルド・スワン』は中国現代史の実録記であり、1909年から1978年までの中国民衆の生活の記録でもある。第二次世界大戦前の四十年間と大戦後のあまり知られていない四十年間が中国内部から描かれている。

書き出しは「十五歳で、私の祖母は軍閥將軍の妾になった。」で始まり、時代は今世紀初頭の中国東北部、つまり満州が舞台である。この作品を読み始める現代のわれわれは、この時代が日本軍国主義の軍靴を踏み荒らし始めていること、日本の民衆が満州移住をしていること、さまざまな策謀と策略と戦略が展開されることなどを、歴史的事実として知っている。この政情の混沌とした時代に十五歳の少女の運命が語り始められる。さらに、われわれがその後の歴史的事実、満州国なるものがすでに存在せず、この地を蹂躪した日本軍も失せ、中国共産党が政権をとったことを知っていれば、この少女の運命におおきな関心を読者は持つだろう。つまり、毛沢東時代の中国の民衆の生活を知らないから。ノン・フィクションとはいえ、その後の展開に期待を持たせる点で成功している。

さてこの少女は一警官の娘で、中国人の習慣をうまく利用した父親の手で妾とされ、相手は軍閥の將軍であり、この纏足の少女の生活は貧困から遠ざかる。そして生まれた女の子は、つまり作者の母親は聡明で共産党を支持し、革命家と結婚するが地位が高いが故に文化大革命にまきこまれ収

容所の生活を余儀なくされた。作者自身も両親の種々の体験を目撃し、現在はイギリスに住んでいる。彼女たち三代の女性の実録であるが、人間の生き様としての物語性はあまりにそろっている。

まず、軍閥將軍の夷太太（側室）になった玉芳の運命を簡単にたどってみる。二歳の時に纏足を始めた玉芳は、警官である父親の出世のために薛將軍の夷太太としてさし出された。義県に家をあてがわれ、次に將軍が訪れたのは六年後の1930年だった。このとき身ごもって生まれたのが宝琴である。將軍の本拠地である盧龍に呼ばれるが、正妻の思わくを知って、逃げ帰る。翌年、將軍は死に、その遺言により玉芳は自由の身となる。実家に戻って、先祖代々から満州皇帝の侍医であった六十五歳の夏医師と結婚したのは二十六歳の時だった。夏医師は、再婚から生じたいざごぎを解決するために財産をすべて子供たちに分け与えて玉芳と共に錦州に移る。夏医師夫婦の生活は出直しのため貧困ではあったが、幸福であった。夏医師の診療の評判が高まり、暮らし向きも良くなる。娘の宝琴を育て上げ、共産黨員王愚との結婚式が質素であることに不満を抱きながらも、夏医師と共に娘夫婦が住む四川省の宜賓に移る。夏医師が亡きあと、王愚の理由で成都に移り住む。作者の祖母にあたる玉芳の生活が語られる中心的部分は娘の宝琴が学校に行くようになるまでで、ここに描き出されるのは解放以前の中国の民衆社会であり、人々の慣習や生き方である。

二代目の宝琴の人生も、母親の玉芳以上に苦しみが多かった。母が再婚したとき夏徳鴻と名を改める。幼い頃は母の再婚先の夏医師の家でいじめられ、越した先での錦州では日本語が公用語となっている小学校で日本人生徒との露骨な差別にあう。日本の敗戦を喜び、貧困な民衆と国民党のふるまいを見て、共産党に入ることを決意したのが十六歳の時であった。学生運動に参加し、革命のために働きたいと考えているとき王愚に出会う。王愚との結婚に際しては、国民党との関係を質されたのち仮の黨員資格を得る。しかし夫の故郷に行っても上司の嫌がらせを受けて容易に黨員にはなれない。勤務組織が変わってから正式黨員になり、それまでの仮黨員生活は二年間に及んだ。その間、夫は四川省の党宣伝部部長になったが、妻

が正式黨員になるためになんらの助力もしなかった。夫である王愚は延安以来の生え抜きの黨員で、潔癖なる模範黨員であることを自認し、妻に試練として忍耐を求めた。これがため徳鴻は流産をし、融通のきかない夫に思いやりにないと批判した。王愚は故郷に戻ってから張守愚と名を変え、四川省の党幹部となっても潔癖性をつらぬき、家族や親戚に対して安易な特権の利用を許さなかった。徳鴻が国民党との関係があったという理由で「隠蔽反革命分子」の対象になって拘束されたときも夫の守愚は冷たい。高級幹部である夫は試練と受けとめていたのであり、家族よりも党を優先させた。この頃までに二人の間には四人の子供が生れていた。そしてもっと苛酷な文化大革命下では、守愚の潔癖性と思慮深さが災いして、二人は批判され、守愚は囚われの身となる。かつての部下が実権を握り、これを文化大革命と共に守愚が批判し、毛沢東に手紙を書いたが、達せられず、発覚したためである。徳鴻は夫を救うために北京の周恩来に会いに行き、夫は釈放となる。だが夫は精神に異常をきたしていた。治療不足ではあったが小康状態になる。そして二人を待っていたのは「思想改造」であり、守愚はヒマラヤ山脈の東端にある幹部学校に送られ、徳鴻も高地の農村である牛郎墳に送られた。夫婦はそれぞれ体調をくずし、特に守愚は体力が衰え、訪れた息子に「この状態で死んだら共産党を信じることはない」と言いきる。吹き荒れた文革の風がおさまろうとするとき、北京での治療も著しい効果をあらわさず、心臓発作で守愚は死ぬ。周恩来の死ぬ前の年であった。徳鴻は、夫の死後の党の「悼辞」が重要であるとして納得のできるものとするために奮闘し、毛沢東の死後、周恩来の覚え書きで名誉回復をはたした。前近代的な中国社会が毛沢東による革命、解放そして社会主義政権が定着したのであるが、それを支えたのが地方の省レベルの政治でもある。その政治の中枢部にいた作者の両親の波乱に満ちた、そしてさまざまな政策によって翻弄された日々が描き出されたのである。

そして三代めとなる作者、張戎はこのような両親を見ながら育つ、自らの環境である幹部レベルの生活と民衆のそれとの違いを知って、むしろ特権があることを恥とした。このひかえめな姿勢は

父親の潔癖性による教育のためである。そして学校では毛沢東の方針による教育にどっぷりとつかっていたが、紅衛兵の隊列に入るにも遅れをとった。吹き荒れる文革の嵐の中で批判される両親を見て、文革、さらには中国そのものに疑いを持つまでになる。「思想改造」で農村に入っても農民から学ぶのは肉体労働のつらさのみだった。工場の職場に移るが、職場から選ばれて四川大学に入り、英語を学ぶ。毛沢東が死んだとき解放感をおぼえたが、仲間がいたので泣きまねをし、自らの気持を抑えた。勉学意欲が強まり、外国へ行くことを切望し、イギリス留学の試験に合格する。この作者の成長過程は、毛沢東の教育の手中にあって、毛沢東の政治の不当性を次第に知るまでに至ることであった。つまり、一連の政策や両親の不遇、作者自身の半生の翻弄された生活は、何が根源で、それがどこにあるかを追い求めたということになる。

II 主人公たちと政策と史実

1 解放以前

1949年中華人民共和国が成立したとき、玉芳が四十歳、徳鴻と守愚はそれぞれ十八歳と二十八歳で結婚二カ月めで、二人は夫の故郷に向けての旅の途中だった。解放以前の中国はすでにわれわれがよく知っている混乱の状態である。つまり中国の植民地化をねらっての日本の野望、それを阻止せんとするアメリカを中心とした列強の思わく、そして中国を統一せんとする国民党、排日抗日運動を展開する中国共産党、そしておのれの利権を手に入れ、さらにむさぼろうとする軍閥たちが入り乱れていた。

ここで描かれるのは玉芳の生活と宝琴（徳鴻）の思いである。警官ではあっても野望を持ち、纏足の娘を使って地位を上げようとする玉芳の父親は中国の伝統的な因習を利用した。娘が側室となると軍閥將軍に取り立てられ、警察の副署長になる。自らも二人の夷太太を手に入れるほどになる。妻妾同居の生活を営みはすれど、妻や子供たちにあいそをつかれ、阿片中毒となり、死ぬときには「役人にはなるな」と子供たちに述懐する。

玉芳の生活は將軍の家からはるか三百キロも離れたところで始まった。離れている間は將軍に対

する思いはつのも、六年後に会ったときには恭順の気持だけであった。夷太太の生活は麻雀や阿片の吸引が普通だった。しかし玉芳は芝居を見たり、読書にふけるが、退屈のあまり実家に戻っても父親にいい顔をされず、「嫁鶏随鶏、嫁狗随狗（鶏に嫁しては鶏に従い、犬に嫁しては犬に従え）」という格言を出しては不平不満をいさめられた。

この間、中国は薛^{シュエ}將軍が活躍するような時代は過ぎ去り、国民党が統一しようとしており、張學良が国民党と手を結んだ。そして満州国が日本軍によって擁立された1932年には將軍は重病となり、死ぬ。將軍の遺言によって玉芳は自由の身になった。夷太太の扱いとしては破格のことだった。妻妾同居の家に戻っても父親から「剋（縁起の悪い存在）」として嫌われる。満人の医師夏先生と結婚しても義理の長男の死の抗議や子供たちから攻撃を受け、そのため財産を分け与えて錦州に越す。そして錦州での貧しいながらも生活が始まり、やがて夏先生は満州の四大名医になり、裕福になる。

この作品では、ここまでの部分に古い中国のさまざまな因習や習慣が最も語られている。特に作者の母親の幼いときの体験を通じて描写されている。漢族や満族の習慣、結婚、大家族の家庭内での生活、春節や祭などである。確かに国際情勢としては日本軍が溥儀を満州皇帝として擁立し、戦争前夜の様相が展開されつつあった。例えば張學良は奉天から日本軍に追い出され、主人公たちが住む錦州に来て腰を据えたが再度日本軍の手によって追い出されてしまう。満州から日本へ食料が運び出され、食料不足になりはするが、この家族にとっては幸福な時代であった。

そして日本軍の占領下では、宝琴から名をかえた徳鴻が小学校に通うようになり、差別を知る。

教師たちは、満州国こそ地上の楽園であると教えた。だが、この国が楽園と呼べるとしたら、それは日本人のためだけに存在する——母のように幼い者さえ、そう感じていた。日本人の子供たちは、中国人とはちがう学校に通った。日本人の学校は設備が立派で、暖房もよくきぎ、床も窓ガラスもびかびかに磨いてあった。中国人の学校は、荒れはてた寺か、だれかが寄付した倒壊寸前の家だった。暖房はない。冬にな

ると、寒さをまぎらすために、授業の最中にクラス全員で近所をひとまわり走ったり、部屋の中で足ぶみしたりしなくてはならなかった。

教師は、ほとんどが日本人だった。教え方も日本式で、教師は平気で生徒を殴った。女生徒の髪は耳たぶの一センチ下で切りそろえること、といったような校則や礼儀作法をほんの少しでも破ろうものなら、ピンタが飛んできた。男子も女子も、顔を思いっきり平手で殴られた。男子生徒は、こん棒で頭を殴られることも珍しくなかった。雪の中に何時間もひざまずかせる体罰もあった。

中国人の子供が町で日本人とすれちがう時は、たとえ相手の日本人が自分より年下でも、頭を下げて道をゆずらなければならなかった。日本人の子供たちは、よく中国人の子供たちをつかまえては理由もなしに殴った。先生とすれちがうときも、うやうやしくお辞儀をしなくてはならない。日本人の先生は草原を駆けぬけるつむじ風みたいね、通り過ぎる端から草がなぎたおされていくわ、と母は友人と冗談を言いあった。

(第三章「満州よいとこ、よいお国」)

子供の世界から見た日本の姿である。だがその日本の敗戦と薄儀の退位は皆を喜ばせた。徳鴻は日本人たちの行動を盗み見て、敗戦者となった日本人たちを知る。

人々は有頂天になって、通りにとびだした。母は、学校のようなすを見に行った。校内はしんと静まりかえって、事務室の一角からかすかな物音が聞こえるだけだった。母は足音をしのばせて近づき、窓からのぞきこんだ。日本人の教師たちが身を寄せあって泣いているのが見えた。

その夜、母はほとんど眠れず、夜明けにはもう床から起き出した。朝になって玄関の戸をあけると、通りに小さな人だかりがしていた。日本人の婦人と二人の子供の死体どころがっている。日本人将校が切腹をし、その家族がリンチされたのだという。

日本の降伏から二、三日たった日の朝、夏家のとなりの日本人一家が死んでいるのが発見された。服毒自殺したという噂であった。錦州のいたるところで、日本人が自殺したり暴行されたりしていた。日本人の家は、例外なく掠奪された。

(第四章「国なき隷属の民」)

日本人が打ちひしがれているところへ次に現れたのはロシア兵である。このロシア兵たちも日本兵と変わりはない。

ロシア兵は工場に残っていた物資を分配するだけでなく、工場そのものを解体しはじめた。錦州に二つあった精油施設も、解体してソ連に持ち帰ってしまった。ロシア兵は賠償金のかわりだと言ったが、中国人から見れば産業に大打撃を与える掠奪行為にはかならない。

ロシア兵は勝手に家にあがりこみ、気に入ったものを何でも持っていった。とくに時計と衣類が好きだった。中国人女性がロシア兵に強姦されたという噂が、町じゅうに野火のように広がった。日本の支配から自分たちを「解放」してくれた兵隊を恐れて、女たちは身を隠すようになった。やがて、錦州の町には不安と怒りが渦巻きはじめた。(同)

そして始まったのは国民党と共産党の支配地争いであった。四カ月の間に四つの軍隊が錦州に来たのである。このような環境で徳鴻は育った。成長して十五歳になった徳鴻の通う女学校には国民党の将校たちが妾となる女生徒たちを探しに来た。徳鴻も、むろんその対象になった。

母は、自分の伴侶は自分で選ぶことに決めていた。女性が物のように扱われる風潮に幻滅し、男が公然と妾を囲うような社会を憎んでいた。夏先生も祖母も母の気もちをわかってくれていたが、将校たちから結婚の申しこみがひきもきらず、うらみを買わないよう穏便にことわるのに神経をすりへらしていた。(同)

解放前の時代の主人公たちは中国の伝統的な因習の生活に従って暮してはいたが、すべての人々を襲った歴史的な情勢がもたらした混乱に翻弄されていたのである。

2 張守愚と整風運動

徳鴻は学生連合会の活動報告のために錦州の省政府に向いた。共産党に入りたいためでもあった。ここで未来の夫、張守愚に出会う。この張守愚は四川省出身で十七歳で共産党に入り、さらに革命戦士にならんとして学ぶために長征後の毛沢東のいる延安に行く。

延安の町は、すばらしかった。人々は熱気にあふれ、希望に満ち、はるかな目標をめざして頑張っていた。党の指導者たちも、一般の党員と同じように質素な生活をしていて、国民党の将校とは、まるで反対だ。延安での暮らしは、万人が平等とまでは言えない

ものの、それまで父が見てきた社会にくらべれば正義の天国だった。(第五章「恋を語りあう」)

この地に「整風運動」が起きた。ここに関係する部分を全文引用しておく。

1942年、毛沢東は「整風運動」を提唱し、延安でおこなわれている諸制度について批判があれば遠慮なく言うように、と指示した。王實味(ワン・シウエイ)をリーダーとする学院の若手研究員グループは、党の指導層に対する批判や、自由と発言の機会増大を求める意見をのせた大字報(壁新聞)を貼り出した。父も、このグループに参加していた。若手研究員たちの行動は論争を巻きおこし、毛沢東みずからが大字報を見てやって来た。

若手研究員たちの意見は、毛沢東の気に入らなかつた。毛は批判運動を魔女狩りに転じた。王實味は、トロツキー主義者でスパイであると糾弾された。最年少だった父は、学院の指導者の一人で中国におけるマルクス主義解釈の第一人者艾思寄(アイ・スチイ)から「非常に初歩的な誤りをおかした」と批判された。このことがあるまでは、艾思寄は父のことを「明晰で鋭い頭脳の持ち主である」と、しばしば賞賛していた。父たちは、それから何カ月にもわたって徹底討論の場に引き出され、容赦ない批判にさらされ、くりかえし自己批判を求められた。おまえたちのしたことは延安に混乱をひきおこし、党の団結と紀律を弱め、ひいては中国を日本の侵略及び貧困と不正から救い出すという偉大な目標さえも台無しにしかねないものだった、と非難された。党の指導者たちからは、偉大な目標を実現させるためには党に完全に服従することが絶対に必要なのである、とくりかえし教えこまれた。

学院は閉鎖され、父は中央党校へ派遣されて、農民あがりで半文盲の共産党職員に中国の古代史を教えることになった。試練は、父を筋金入りの共産党員に変えた。父にとっても、ほかの若い仲間にとっても、延安は命と信念を賭けてやって来た場所であった。このくらいのことで弱音を吐くわけにはいかない。父は自分に対する厳しい処分を当然のことと甘受するだけでなく、救国という使命に立ち向かうために魂の汚れを洗い落とす崇高な機会を与えられたことに感謝さえした。そして、この試練を絶えぬには自分に鞭打って徹底的に努力するしか道はない、我が身を犠牲にすることも自我を完全に捨てることも厭うまい、と誓った。(同)

こうして張守愚は党員として鍛え上げられたのである。党員としてのこの姿勢が、後の変質した

共産党に追撃されることを知らずに。

中国史研究者によれば「整風運動」は「毛沢東への個人崇拜の出発点(『中国20世紀史』東大出版会、1993)」とされている。すでに延安は革命の根拠地として張守愚のような若者たちでふくれあがり、戦争による難民たちも流れ込んでいた。当然ながら若者たちの不満が生じ「解放日報文芸副刊」に種々の論文が載った。

かれ(王實味)は延安の男女比が十八対一で「多くの青年が恋人をみつけれられない」とか、「生活があまりに単調、無味感想であり、娯楽に乏しい」とのべて青年たちの不満を代弁した。そして芸術家が、「情熱的に敏感に暗黒と汚辱をえぐり出」すようにとよびかけた。その上、王實味は「特にわれわれの陣営に向けて仕事をすすめてもらいたい」と、暴露の矛先を延安内部に向けてように主張したのである。王らは壁新聞『矢的』を発行し、幹部の腐敗や衣食住の不平等を指弾して、一時は延安の空気を一変させるほどの影響を与えた。婦人の地位の低さや、男女間の不平等についての丁玲の一連の発言にも共感が寄せられた。その他、馬加の短篇小説「隔たり」では、部隊の責任者が既婚の女優と愛し合ったことから女優の夫婦関係が崩れることを描いたり、雷加の「安楽椅子に眠る人」でも、長征に参加した古参幹部が、後方病院長におさまること、患者の苦痛も考えずに享楽にうつつをぬかすといった題材が好んでとりあげられた。こうした作品の背景には、先にのべたような格差の存在とともに、高級幹部に年若い女性が魅力を感じ、青年を無視しがちになるといった傾向もあった。このような風潮や、噂程度の不満だけでなく、毛沢東が夫人賀子珍と離婚し、二流とはいえ上海の映画女優で二十二歳も年下の江青と再婚するといった、話題に乏しい延安ではまさに格好のゴシップ材料が現にあったのである。(『中国近現代史』下巻、第七章第五節 抗日戦争下の文化、東大出版会、1982)

そして党内教育としての「整風運動」が開始された。

党員一人一人が、「学風・党风・文風」、つまり主観主義・セクト主義・党八股(無内容で形式的文章)的な作風を克服することが求められた。整風運動は第一に、党員や行政幹部の知的水準が低いこと、例えば延安県下六十の郷長クラスがすべて文盲で、区クラスの幹部においてさえも半分以上は文盲という文化的後進状況の中で、党員の理論武装と党の思想的統一をはか

ることを目的としていた。第二に党内外の知識人、とりわけ党員知識人が、書物の上の知識・理論で満足していることを批判し、「マルクス・レーニン主義の普遍的真理と中国革命の具体的実践」を結びつけることを求めている。すなわち、マルクス・レーニンらによって体系づけられたマルクス主義、さらにはソ連およびコミンテルンの理論や経験を呑みにせず、「中国革命の具体的実践」を、「それにふさわしい理論の高さにまで、高め」ることが求められた。そしてその具体的な結晶体として「毛沢東思想」が全面的に称揚されることになった。(同)

張守愚が筋金入りの党員となった背景には、このような史実があった。幹部の腐敗を張守愚は追求したろうか。おそらくは追求したのであろう。厳しい自己批判を求められたとされているから。つまり目の幹部批判は、「延安に混乱をひきおこし、党の団結と紀律を弱め、ひいては中国を日本の侵略及び貧困と不正から救い出すという偉大な目標さえも台無しにしかねないもの」だからである。張守愚の党員としての生活はすべてこの時点から出発する。

3 夏徳鴻と思想改造、「隠蔽反革命分子」の摘発

夏徳鴻は夫、張守愚の故郷の四川省宜賓で仮党員の一年を終えようとしていた。党支部の決定が必要であるが、その構成員は徳鴻の勤務する宜賓県の宣伝部の上司、米女史と夫の護衛係の三人だった。二人は入党を認めるつもりはまったくなく、徳鴻のさまざまな行為をブルジョワ的とした。繰り返し求められたのは自己批判だけだった。たとえば体を清潔にしておくことはプロレタリア的でないと言われて、湯を使う資格のある夫の残り湯を使えば、護衛係から資格がないと批判もされた。これらのことを作者は次のようにまとめる。

人民の生活のあらゆる局面に対する干渉こそ、いわゆる「思想改造」の真髄である。毛沢東は外面的な紀律に加えて、思想のうえでも、事の大小にかかわらず党に完全に服従することを求めている。「革命参加者」は毎週のように「思想審査」の集会に参加し、全員が自分の誤った思想を自己批判すると同時に他人からの批判を受けなくてはならない。こうした集会は往々にして狭量で独善的な人間の独壇場となり、彼らの嫉妬

や欲求不満を晴らす場になった。農民出身の者たちは、集会に名を借りて「ブルジョワ」的な家庭の出身者を攻撃した。共産党革命は本質的には農民の革命的なことから、みんなもっと農民的になるよう自己改造しなくてはならない、という理屈だ。教育のある者は、うしろめたい気分にならざるをえない。農民よりらかな暮らしをしてきたではないかと言われれば、自己批判するしかない。

集会は人民支配の強力な手段だ。集会で忙しければ、私生活に心をわずらわせる暇がない。どうでもいような些細なことばかり追及する風潮も、魂を徹底的に洗なおすには私生活の細部まで掘りおこす必要があるという理屈で正当化された。些細なことを追及する姿勢こそ、干渉と無知がもてはやされた革命の基本的な性格を如実に物語るものだ。しかも、これに恨みつらみが絡んでくる。(第八章「故郷に錦を飾る」)

支部の同志二人は徳鴻の正式党員昇格に反対した。この決定は上部機関の承認を受けて発効するのだが、この評価は不当とみなされ、審査は先送りにされる。ところがこの地方の行政組織の改組にともなって徳鴻は共産主義青年団の部長となり、正式な党員となった。中心的な仕事は新政府に対する支持を求める活動である。具体的には工場を訪れて不満を聞き、問題処理にあたり、共産党への加入を勧めることだった。このときの上司、^{ツイン}挺女史とは気があった。しかし徳鴻が三人めの子を産むために入院したとき、この挺女史は張守愚に言い寄るが、拒絶された。挺女史が必ず恨みをはらすことを知っている守愚は、仕返しを恐れて一家と共に成都市に移る。

成都での守愚の仕事は文教対策室長で、徳鴻は成都東城区の宣伝部長となった。そして1955年7月に「隠蔽反革命分子」の摘発運動が始まった。全党員が対象になったのであるが、徳鴻は例外として扱われ、審査の対象となった。つまり隔離審査であり、六カ月におよんだ。「反革命分子」のレッテルを貼られないように耐え、「君はいま、試されている。苦難が、君を本物の党員にする（磨難会使你成為真正的共産党員）」(第十章「苦難が、君を本物の党員にする」ということばを心の中で繰り返す。

この運動はもとはと言えば、魯迅の弟子、胡風が毛沢東の「文芸講話」が文芸政策の基本に据えられたことを不満として意見書を出したことがき

っかけである。毛沢東はこれを厳しく批判した。

胡風らは毛沢東と思想的に対立したわけではないが、党派にとらわれず自由な意志を尊ぶ姿勢が毛沢東に危機感を抱かせた。毛は、自由な発言を放置すれば自分の絶対的な権威が揺るぎかねない、とおそれたのである。新生中国は行動も思想も一枚岩でなければならない、厳重な紀律をもって臨まなければ国が崩壊してしまう、というのが毛沢東の主張だった。毛は、多数の著名な作家を「反革命陰謀」のかどで投獄させた。「反革命」は、最悪の場合死刑もありうる重大な嫌疑だ。

これを境に、中国は自由にものが言えない国になっていった。共産党が政権を奪取して以来すでにあらゆるメディアが党の支配下に置かれていたが、こんどは国民ひとりひとりの思想までも国家が厳しく統制しようとはじめたのである。

毛沢東は、今回の運動の標的は「帝国主義諸国のスパイ、国民党のスパイ、トロツキー信奉者、国民党の元将校、それに共産党員の中の裏切者」である、と言った。（第十章「苦難が、君を本物の党員にする」）

確かに毛沢東は危機意識を持っていた。1950年に朝鮮戦争が始まり、1953年に休戦条約が結ばれたとはいえ、一触即発の状態であり、台湾では国民党政府が体勢を建て直しつつあった。この運動で国民党となんらかの関係をもった人間を洗い出そうとしたのである。その一方で農業集団化、商工業の国有化が進められた。ところがこの国有化を進めるにあたって有能な人材が必要であった。そのため国民党のスパイと疑われた徳鴻の審査は中断され、日中はこの仕事にあたり、夜は拘束された部屋で宿泊した。つまり「控制使用（監視下の雇用）」である。この不安定な状態は一年半続き、最後には国民党との関係はなしと結論づけられた。この摘発運動で十六万人が『反革命』のレッテルを貼られ、その後の三十年間の不遇の時代を迎えることになった。そして作者はつけ加える。

国民党時代の最後の痕跡まで消し去ろうとする運動は、家庭的背景や血縁関係を全面に押し出す結果となった。中国には、ひとり罪人を出すと老若男女を問わず一族全員が処刑される、という歴史があった。誅連九族といって、九親等離れた親族まで根絶やしにされた例もある。

これまでは、共産党幹部の中にも「有了問題」の人がいた。親が、共産党の敵でも、子供が共産党に入党して高い地位にのぼる例はめずらしくなかった。実際、初期の共産党指導者の大多数は「出身不好」であった。しかし1955年を境に、家庭的背景を重視する傾向がどんどん強まっていった。その後、毛沢東がつきからつきへと気に入らない人間の追放運動を打ち出すごとに、犠牲者の数は雪だるま式に増えた。しかも、ひとりが失脚するたびに、家族をはじめとする周囲の人々が巻きこまれていった。

人々の受難にもかかわらず、と言うより、たぶんこうした鉄の支配のおかげもあって、1956年の中国はどの時期よりも安定していた。外国軍隊による占領もない。内戦もない。飢饉も、匪賊も、インフレも、すべて過去のもののように思われた。中国人の夢だった政情の安定が、ようやく実現した。それがあったから、母のように苦境に置かれた多くの人々も、共産主義に対する信頼を捨てなかったのである。

（第十一章「反右以降、口を開く者なし」）

ところがまだ受難は続く。

4 百花斉放・百家争鳴

社会や生活に問題や矛盾が表面化した主要な要因が、党員の官僚主義、セクト主義、主観主義にあるとして、この「人民内部」の処理に百花斉放・百家争鳴の政策がとられた。つまり、「圧迫・強制・命令・弾圧」というような官僚主義的な方法をとれば、元来が非敵対的な矛盾も時には敵対的な矛盾に転化し、人民諸層の間に收拾のつかない事態が発生し、もし国の内外の敵勢力がこの事態を利用し、人民諸層の間に離間・挑発を策動すれば、ハンガリー事件のような事態（「中国近現代史 第十章第一節大躍進」東大出版会、1982）」も起こるとしたのである。

1956年春、毛沢東は百花斉放（百種類の花が咲くようにしてやりなさい）政策を打ち出した。この政策は、芸術や文学や科学の分野でより自由な活動を認めようという主旨だった。戦後の復興期以降の産業発展をめざすために国家として知識人の力を動員する必要がある、という党の考えにもとづく政策だ。

（第十一章「反右以降、口を開く者なし」）

徳鴻は、この政策のもとで知識人に、党員批判が要請されたことを、「自由化をさらに推し進め

ようという姿勢(同)」と見た。そしてこれに感激し、「中国もほんとうに近代的で民主的な政府(同)」をもつことになったと喜び、党员であることを誇らしく思った。この政策について、結果から見てはいるが、作者は次のように記す。

党に対する批判を求めた毛沢東の講話が母たちのレベルまで伝わったとき、同じ時期に毛が発言したもうひとつの内容は知らされなかった。それは「引蛇出洞(ヘビをねぐらからおびき出す)、すなわち毛沢東と毛沢東の政策に反対する連中をあばく、という意図の発言であった。この前年にソ連ではフルシチョフがスターリンを批判する秘密報告をおこなっており、自分をスターリンと同一視していた毛沢東は、これに大きなショックを受けていた。しかも、その年の秋にはハンガリーで暴動が起こって、短期間とはいえ、いったん確立された共産党政権がくつがえされる事件があり、これも毛の不安をかきたてた。中国でも知識階級の大多数が穩健・自由化路線を望んでいることはわかっていたので、毛沢東は「中国版ハンガリー暴動」を防止する必要があると考えた。事実、のちに毛沢東は、共産党批判を勧めたのは畏であり、自分に対立する可能性のある人間を一人のこらずいぶり出すためにそろそろ百花齊放を終わりにしようと言う他の指導者の声をおさえて意図的に延長したのだ、という意味のことをハンガリーの指導者たちに語っている。(同)

こうした裏があることを知らずに、人々はさまざまな場面で批判を受けた。もちろん徳鴻も批判を受け、その一方で地区の指導者として批判を奨励した。そして一年後に「ヘビ」の話が伝わった。この「ヘビ」を狩り出すためにどんな策をとったか。

毛は講話のなかで、「右派分子」が共産党と中国の社会主義を傍若無人に攻撃した、と述べた。右派は知識人全体の一パーセントから十パーセントほどに当たり、これらの者たちを粉碎しなければならない、とも言った。話を簡単にするために毛沢東のあげた数字の中間を取って、知識人の五パーセントを右派として告発することになった。この「割り当て」を満たすためには、母は自分の監督下にある組織から合計百人の右派を告発しなければならない。(同)

単純計算で数字をはじき出し、帳尻を合わせるために「右派分子」の摘発をしたのである。反右派闘争と称して。

批判の発言をしたものだけでなく、支持したものも「毒草」思想の持ち主として告発され、やがて「右派分子」というレッテルのもとに、四十数万の人びとが「労働による思想改造」のため農村に送られた。文芸界では丁玲、馮雪峯らが摘発された。王蒙、劉賓雁など官僚主義をついた作品を書いた青年作家たちも沈黙を強いられた。

(「中国20世紀史」第六章 3 民衆の自由、民主への憧れ)

地方の人々は悲惨だった。張守愚のような高級幹部はさほど悩まなかったが、徳鴻のような中・下級党员は板ばさみになった。党や党员に対する批判を勧めておきながら、その発言内容にもとづいて今度は告発しなければならない。しかも、明確な判断基準などは存在していない。

省当局は遅々として進まない運動に業を煮やして、郝という人物を見せしめにすることにした。郝氏は、四川省各地から優秀な科学者が集まっている研究施設を監督する党書記だった。氏は相当数の右派を告発しなければならない立場にあったが、自分の担当する組織には右派分子はただの一人もいないという報告をおこなった。「そんなはずはない」。郝氏の上司は納得しなかった。(第十一章「反右以降、口を開く者なし」)

この郝^郝氏は主張を変えないためその姿勢をとがめられ、除名され、解雇され、研究室の掃除夫にされてしまう。徳鴻自身も関係する担当教育施設で「割り当て」を出すはめになるが、その区域で奨学金増額を求める学生百三十人がデモ行進したことから、市当局はこの学生たちを徳鴻の「割り当て」分とした。そして徳鴻の軟弱な姿勢を追求しようとした上司も右派分子とされる事態になる。このずさんな右派分子告発の「割り当て」に個人的な恨みをはらしたり、仇敵を売ることさえ行われた。張守愚のかつての部下、挺女子夫婦(夫婦が共に「挺」の字が名前に使われていたため「二挺」と呼ばれていた)はこの運動を利用した。

宜賓では、「二挺」が自分たちの気に入らない人間や目ざわりな人間に次から次へと右派分子のレッテルを貼って追放した。宜賓時代に父が可愛がっていた有能な部下のほとんどが、右派分子として告発された。

父がとくに目をかけていた部下のひとり、[「極右分子」]のレッテルを貼られた。罪状は、中国のソ連に対する依存が「全面的」であってはならないという意味の発言をたった一度おこなった、というだけのことだった。それが、対ソ全面依存を打ち出していた当時の姿勢に逆行した点をつかれたのである (同)

これらのレッテルを貼られた右派にも種々の呼び方がある。割り当ての頭数をそろえるためにくじ引きで運悪くレッテルを貼られたものは「抽籤右派」、遅くまで長引く会議中に便所に行った間に右派にされた「廁所右派」、会議で一言も発言しない、つまり外に出ないだけで内に毒を持っている者は「有毒不放」、部下を告発できずに自らを右派とする「自認右派」などである。これらのことを目にし、聞くことでわれわれ読者に民衆の苦しみが伝わってくる。およそ民主的な論議を経てのものではないことは明らかだ。義務に追われ、猜疑心と責任転嫁などを心に抱くのみで、とうてい人権などを考えてはいないことがうかがえる。つまり告発で私怨を晴らす人間がいる限り、人々にはいつも不安がつきまわっていたのである。そしてレッテルを貼られた人たちはどうなったか。

右派のレッテルを貼られた人たちは、家族ともども社会の下層へ突き落とされ、苦汁をなめさせられた。反右派闘争は、いかなる種類の批判も今後は許されないという教訓を、なさけ容赦なくはっきりと示した。人々は、このときを境に不平不満を口にしなくなった。というよりも、いっさい口をつぐんでしまった。当時流行した「三反以后莫管錢、反右以后莫發言(三反以降、金を受領する者なく、反右以降、口を開く者なし)」という言い回しが、社会の雰囲気を与えている。(同)

そして徳鴻にとっても、この時期が転換期にもなった。共産主義を信奉する気持はあっても実践面では疑問を持つようになったのである。

5 文化大革命と張一家

この書では文化大革命時の記述が最も多く、第十五章から第二十二章まででほぼ二分の一を占めている。つまり書くべき内容が多く、したがって作者らの生活が厳しく、翻弄されていたことを意

味していることになる。だから、より正確さをあらしむために煩雑になること覚悟で引用文が多くなることを前もって記しておく。

プロレタリア文化大革命が表面化したきっかけはよく知られているように、1965年11月に姚文元の論文「新編歴史劇『海瑞の免官』を評す」が上海で発行されている「文匯報」に掲載されたときからである。呉晗が書いた京劇の脚本『海瑞の免官』の解釈が、毛沢東によって失脚させられた前国防長の彭徳懐の無実を訴え、復活を求め、間接的に毛沢東に対する批判を行ったものとされた。すでにこの時点では林彪が国防部長に任命され、毛沢東思想の教育を軍部内で、文化・文芸面では江青が徹底させていた。そして政治の面では指導部内で、アメリカ軍の北爆にさらされているヴェトナムの支援をめぐる対立が明確になっていた。

総参謀長の羅瑞卿、国防長の林彪との間の論争がそれである。羅はアメリカのヴェトナム侵略を中国に対する直接的・即時的脅威と受けとり、軍事・技術(いわゆる「専」)を重視するとともに、ソ連とも提携すべきだとの考えに立っていた(「対独戦勝利を記念して反米闘争を貫徹しよう」65年5月10日)。他方、林彪はアメリカの軍事的脅威よりもソ連の修正主義の方が中国社会主義にとっては脅威だと考え、もしアメリカが中国に攻めこんでくれば伝統的な遊撃戦を主とする人民戦争で迎え撃てばよく、そのためにも国内の人民と解放軍との思想・教育(いわゆる「紅」)を重視すべきだとした(「人民戦争の勝利万歳」65年9月3日)。

林の主張は明らかに毛沢東の意向を示しており、軍首脳の対立は党指導部のそれでもあった。対立の帰結する所はソ連と手を組むかどうかという点にあり、これを引き金に、それまで潜行してきた意見・政策の対立が、一挙に毛の手によって政治闘争へと激発させられるのである。

(『中国近現代史』第11章第1節「動乱の10年」の始まり)

毛沢東が北京では実権をふるうことができなかったのは、大躍進政策の失敗のためであった。しかし毛沢東は上海で攻撃を始めたのである。この攻撃に対して、劉少奇、鄧小平らは「問題を学術・文化面に限定して考え、彭真らに『文化革命五人小組の当面の学術討論に関する報告提綱』(い

いわゆる『二月提綱』66年2月)を作成(同)させた。作者の父、張守愚はこの「二月提綱」を受け入れた。

四月になって、四川省における文化大革命の方向を定めるために、中央政治局の「二月提綱」にそった主旨で父が文章をまとめることになった。父の書いた文章は、「四月意見」として知られるようになった。論争は、厳に學術の枠内にとどめること。常軌を逸した告発を行ってはならない。真実の前には、万人平等である。党は力づくで知識人を抑圧してはならない——「四月意見」は、このような内容だった。

五月の発表直前になって、「四月意見」は突然差し止められた。中央政治局が新しい決議を採決したのだ。

(第十五章「まず破壊せよ、建設はそこから生まれる」)

つまり、毛沢東が復権したのである。毛沢東は「二月提綱」を無効とし、反体制派の学者や擁護してきた党員を「走資本主義道路的当権派(走資派)」と呼んでこの勢力に宣戦布告した。

「走資派」とは、だれをさすのか。毛沢東自身にも厳密な区別はなかった。とりあえずはっきりしていたのは、党の北京市委員会を全員解任しようという意向だった。そして、それは実行に移された。さらに毛は、劉少奇、鄧小平、それに「党内にひそむブルジョワ勢力の司令部」を排除しようと考えた。だが巨大な党組織の中で、自分に忠実な者たちと、劉少奇や鄧小平ら「走資派」につこうとする者たちを、どうやって区別するのか。毛沢東は、党内で自分の側につくのは三分の一ぐらいだろうと読んだ。そして、敵を一人残らず殲滅するために、共産党という組織全体を滅ぼしてしまおうと考えた。忠誠心のある者は、自力で動乱をくぐりぬけてくるだろう。「まず破壊せよ、建設はそこから生まれる」(破字当頭、立在其中)という毛のことばが、そうした論理を象徴している。党が崩壊するかもしれない。それでも、かまわなかった。皇帝としての毛沢東は、つねに共産主義者として毛沢東よりも上位にあったのだ。たとえ自分に全面的な忠誠を誓う人間をゆえなく傷つけることになったとしても、毛は平気だった。後漢末期の武將曹操(ツァオツァオ)の「疑わしきは討つ。さすれば、討たれる心配はない」という至言を座右の銘に挙げてはばからなかった毛であれば、不思議はない。曹操は、自分の命を救ってくれた老夫婦を裏切り者と思いこんで殺してしまい、あとで過ちに気づいてこう言ったと伝えられている。

対象をはっきり特定しないまま闘争を呼びかける毛沢東の声は、国民と党員を深刻な混乱に陥れた。毛が何を狙っているのか、今回の闘争の対象がいったいだれなのか、はっきりわかっている人間はほとんどいなかった。私の両親も、ほかの高級幹部も、党のなかに毛沢東の気に入らない者がいるらしいことはわかったが、それがだれなのかも見当もつかなかった。もしかしたら、自分たちかもしれない。みんな不安にうろたえた。(同)

そして「毛主席語録」が作られ、子供に教えこまれ、暗唱させられたのである。このような時流に作者、張戎は毛主席に恐れを抱いた。

ある日、『人民日報』にこんな記事がのった。年老的な農夫が、「目がさめたときにどちらを向いても毛主席の顔が見られるように」、寝室に毛主席の肖像を印刷したポスターを三十二枚も貼りめぐらしたという。そこで、私たちもそれにならって教室の壁を毛主席の慈愛に満ちた顔で埋めつくすことにした。ところが、何日もしないうちに、毛主席の笑顔は一枚のこらず大急ぎではずすことになった。噂では、農民は壁紙のかわりにポスターを使ったのだという。毛沢東のポスターは最高級の紙に印刷してあったし、無料でもらえたからだ。この記事を書いた記者は「毛主席を汚辱」したという理由で「暗蔵の階級人」とみなされることになった、という顛末がささやかれた。生まれてはじめて、私は毛主席にまつわる恐怖をぼんやりと意識した。(同)

作者の通学する学校では優秀な教員が次々とレッテルを貼られ、張の家族はこの成り行きに悩む。まして守愚と徳鴻夫婦にはとうてい部下たちを告発することなどできない。

四川省当局は、すでに何人かの高級幹部を生贄にあげていた。父は、もうすぐ自分の番が来るにちがいないと予感していた。同僚からも、「きみの下の組織で、つぎはきみに疑いの目を向けるべきではないか」という声があるぞ」と耳打ちされていた。

父も母も、私たちには何も言わなかった。これまで、両親は子供の前では政治の話題を避けてきた。その続きで、いまだに私たちに本心を語るのをためらっていた。それに今となっては、ますます説明のしようがない。状況があまりに複雑でありに混乱していて、父自身、母自身にも把握しきれなくなっていた。いったい何をどう話せば、子供たちにわかるだろうか。それに、たとえわかったとしても、それが何にな

のか。だれにもどうすることもできないのだ。しかも、知っているということ自体が危険をますます大きくするおそれさえあった。結局私たちは、何か破滅的な危機が近づきつつあるというぼんやりした認識はあったものの、何ひとつほんとうの事情を知らされないまま、文化大革命の波に飲みこまれることになった。

こんな状況のなかで、八月がやって来た。突然、中国全土を吹き抜ける嵐のように、何百万という紅衛兵が出現した。(同)

毛沢東崇拜を教えこまれた若者たちが紅衛兵となったのである。作者はこの紅衛兵たちを毛沢東は利用したと断言する。

毛沢東は、紅衛兵を突撃勢力として使おうと考えていた。走資派を批判せよという毛の呼びかけに対して、人民はなかなか反応しなかった。党の政策運営に満足している人も多かったし、何といても人々の脳裡からは一九五七年の教訓がまだ消えていなかった。あのときにも、毛は党の幹部を批判するよう呼びかけておきながら、それに応じて発言した人間を右派分子として弾圧した。今回もきつと同じことだろう。「引蛇出洞」しておいて頭をちょん切るつもりがちがいない——人々は、みなそう思って警戒していた。

人民を思いどおりに動かそうとするならば、党から権威を奪い、毛沢東ただひとりに対する絶対的な忠誠と服従を確立しなければならない。そのためには恐怖という手段が必要だ。それも、あらゆる思考を停止させあらゆる懸念を押しつぶすような戦慄に近い恐怖が必要だ。毛沢東の目には、十代から二十代はじめの若者が格好の道具と映った。この世代は、熱狂的な毛沢東崇拜と「階級闘争」の思想をたたきこまれて育っている。反抗的で、恐いもの知らずで、正義感が強く、冒険に飢えているといった若者の特質をすべて備えている。しかも無知で無責任で、操縦はいたって簡単だ。暴力にも走りやすい。社会を恐怖に陥れ、共産党の基礎を揺さぶり、やがて崩壊に導く大混乱をひきおこすのに必要なとほうもない力を与えてくれるのは、この若者たちをおいてほかにない。「文化大革命に反対する者、毛主席に反対する者は、すべて血祭りに上げよう！」(誰反対文化大革命、誰反対毛主席、我門就和誰血戰到底！)というスローガンが、紅衛兵の役割を言いつくしている。

(第十六章「天をおそれず、地をおそれず」)

この紅衛兵たちは歴史書では次のように記述されている。

かくして文革は、奔流のような勢いの紅衛兵運動に

よって特徴づけられる第二段階へと突入した。青年労働者・大学生・中学生、それに小学生さえも含む無数のグループが各地に結成され、毛沢東の呼びかけに応じて行動を開始した。八月一日に初めて街頭に進出した紅衛兵たちは、片手に赤い『毛沢東語録』を掲げて街中をのし歩き、列車にただ乗りして上京したり、各地を渡り歩いて旧い事物や歴史遺産を、「四旧」を打破すると称して砂壊し、党や行政機関の幹部を「ブルジョワジー」だとして勝手につるし上げたり三角帽をかぶせて街頭でひきずり廻したりした。(その庄巻は十二月に彭真・陸定一・劉瑞卿・楊尚昆らを大衆集会にひきずり出した事件であった。この段階で紅衛兵は早くも公然と劉少奇・鄧小平打倒のスローガンを掲げていた)。紅衛兵たちは北京郊外にある革命烈士の墓をあばくことさえやっている。

……(略)……

紅衛兵の無政府主義的で無規律な行動は、必然的に生産や輸送を著しく妨害し、またその性格上、大同団結をはかることができずに各地で小グループ間の激しい武闘が展開された。周恩来らの実務担当者は遠慮がちに「文闘を用いて武闘を用いるな」と主張したが、もはや狂気のようになった集団の耳には入らなかった。紅衛兵を煽動した毛沢東さえ、どうしようもないほどの勢いになっていたのである。

(『中国近現代史』第11章第1節「動乱10年の始まり」)

むろん作者も姉たちもこの流れの中に巻きこまれた。姉は紅衛兵の運動に嫌気がさし、荒れた図書館の守衛をしながら読書三昧にふけり、その後紅衛兵の特権で旅行に行く。弟の京明も同様に旅行に出る。そして作者も北京巡礼、毛沢東の生家を見るために、友人たちと旅に出る。

その一方で、四川省の党委員会に所属する高級幹部である、作者の父親、張守愚は家でもんもんとしていた。

ぼくには、文化大革命というものがわからない。だが、今の状況は、どう見てもままちがっている。このような革命は、いかなるマルクス主義、いかなる共産主義をもってしても、正当化しうるものではない。人民の基本的な権利や安全が侵されている。言語に絶する状況だ。ぼくは共産黨員として、これ以上の破壊を放っておくわけにはいかない。党中央に、毛主席に、手紙を書くしかないと思っている。

(第十七章「子供たちを『黒五類』にするのですか?」)

守愚は、すでに街では壁新聞で「四川省最大の文革反対派」と名指して攻撃を受けている。理由

は、姚文元の論文転載に抵抗したこと、「肅清に反対し文化大革命を非政治的な学術論争に限定しよう」と提唱した『四月意見』を起草したこと」の二点である。にもかかわらず、守愚は毛沢東宛ての手紙を書く。この手紙を北京に運んだのは妻の徳鴻で、副総理の陶銭との接見で正当性を認められ、拘束されていた守愚は釈放された。

1967年には紅衛兵が跋扈する文化大革命の第二段階が始まる。各地の政治指導部が権力を奪い取るための「奪権闘争」が始まった。上海を先頭に「革命委員会」が次々と誕生して党と政治の権力を掌握した。そして中央では劉少奇、鄧小平、陶銭らは失脚した。張守愚も同様であった。かつての部下、姚女史を先頭に紅衛兵が押しかけた。そのときの父の姿を娘である作者は目撃する。

「私たち紅衛兵を馬鹿にするんじゃないよ！ ほら、ここにもあそこにも、『毒草』だらけじゃないか！」姚女史はそう叫んで、薄手の上質紙に印刷された中国古典文学の本を何冊か棚から取り出した。

「私たち紅衛兵とは、どういう意味だ」。父は言い返した。「きみは、紅衛兵の母親ほどの年齢じゃないか。その歳になれば、もう少し分別があっても良さそうなのだ」。

姚女史は、父に平手打ちをくらわせた。後ろに控えていた者たちも、口々に大声で罵声を浴びせた。なかには笑いをこらえている顔もあったが、造反派の連中は父の書棚から本をひっぱり出し、つぎからつぎへ大きな麻袋に放りこんだ。

……（略）……

生まれてはじめて、父が泣くのを見た。めったに涙を見せたことのない男が、全身をふるわせ、しぼり出すように声をあげて泣いていた。ときどき感情が押さえきれなくなるのか、父は激しく慟哭しながら床に足を踏みならし、壁に頭をばんばん打ちつけた。

驚いて、私はしばらくのあいだ、なすすべもなく父を見ていた。それから、うしろに回って父の背中を抱いた。でも、何と言えよいか、ことばが見つからなかった。父も、ひとこともしゃべらなかつた。暮しをきりつめ、苦勞して買い集めた本だったのに。父の命だったのに。本を燃やしたあと、父のなかで何が起こったのが私にはわかった。

（第十九章「罪を加へんとするに欲するに、何ぞ辭無きを患へんや」）

そして守愚が引っぱり出される場所は批闘大会である。この嵐のような批判のなかで、毛沢東

の写真に対して叩頭もせず、造反派の前で猛然と文化革命反対を口にする。まもなく決定的なことが来た。かつての部下で追放されていた「二挺」が復活し、守愚の戦列復帰を求めた。だがはっきりと拒絶する。「あなたがたとは一切かかわりたくない。ぼくはあなたがたとはちがう種類の人間だ（同）」と。腹を立てた「二挺」が立ち去ると守愚は、またたくまに毛沢東宛の手紙を書き、投函した。むろん捕らわれることを覚悟のうえである。事実、数日後に逮捕された。妻は、徳鴻は紅衛兵の群れにまぎれこんで、周恩来に会い、事情を伝える。周恩来は「國務院」と印刷された公用箋に書きつけ、覚え書きとして徳鴻に渡した。

「一、張守愚は、共産党の黨員として、党の指導者に申訴する権利を有する。申訴がいかに重大な錯誤を含んでいても、それを根拠に当人を反革命で告発してはならない。二、張守愚は、四川省宣伝部副部長として、人民による審査と批判を受けなくてはならない。三、張守愚に対する最終的な処分は、文化大革命が終了するまで見合わせる。周恩来」

（第二十章「魂は売らない」）

かくして徳鴻は、友人を介して夫の釈放に成功したが、夫は精神に異常をきたしていた。狂った父を見守りながら、平静を保とうとする作者の思いは展開されてゆく。

なぜ、人々はこんな怪物のようになってしまったのだろうか？ 何のために、こんな無意味な残虐行為をしなければならぬのだろうか？ 毛沢東に対する私の全幅な信頼は、揺らぎはじめた。それまでは、迫害される人たちを見ながら、心のどこかで「ほんとうに百パーセント無実なのだろうか」と疑う気もちがぬぐいきれなかった。けれど、両親の潔白は、だれよりも私自身が知っている。私にとって完全無欠の偶像だった毛沢東に対する疑いが、少しずつ心にしのびこんできた。それでもこの時点では、私も大多数の人々同様、悪いのは江青と中央文革小組だと思っていた。皇帝にも神にも等しい毛沢東を疑ってみるなど、考えられないことだった。（同）

四川省では二つの造反派が争っていた。「二挺」派と反「二挺」派である。後者に庇護されていた守愚は利用されることを嫌ったため、庇護を解かれた。このため「二挺」派の姚女史に痛めつけら

れ、さらに徳鴻自身もまたや国民党のスパイと決めつけられ、二人への迫害が始まる。

1969年には、革命委員会によって、「走資」派や学生たちの「思想を改造する」ために、何百万という人々が都市から農村へ「下放」された。張一家もちろん例外ではない。作者の祖母と末の弟、小黒を除いての五人はそれぞれ別な場所、四川省の辺境地帯に送られた。作者も含めて辛酸をなめたのである。特に両親の扱いはひどいものだったが、かつての部下たちに助けられながらも、収容所で嵐が過ぎ去るまでを過ごす。

文化大革命のさなかでの張守愚と夏徳鴻夫婦の扱われようを見てきた。これ以上ここに引用する必要はあるまい。文化大革命は、普通に生活を営むものにとって、混乱を引き起こす嵐以外のなものでもないし、人々はそれに翻弄され、犠牲となって、無駄死にさえたのである。毛沢東のと成る社会主義は天国だと信じながら。

III 毛沢東を知る作者

1976年9月9日に毛沢東が死んだことを、作者張戎は四川大学の校庭で他の学生たち共に聞いた。

とほうもない幸福感に、私は一瞬ぼおとなった。しかしつぎの瞬間には、からだの奥底に染みついた自己検閲機能が作動しはじめた。周囲で、慟哭の嵐がわきおこっている。自分もこの場にふさわしい演技をしなければならぬ……。しかし、毛沢東の死に臨んで抱くべき適切な感情が、私には欠如していた。それを隠すところは前で泣きじゃくっている女子学生（学生幹部のひとりだった）の肩しかない、と思った。私はいそいで前の人の肩に顔をうずめ、それらしく見えるよう、これ努めた。（第二十八章 翼をこの手に）

この醒めた思いは何に由来するのか。

作者自身は毛沢東の死のことを書いた後で次のように記す。

毛沢東が死んでから、いろいろなことを考えた。毛沢東は「思想家」と言われている。毛の「思想」の本質は、いったい何だったのだろうか？ 毛沢東思想の中心にあったのは、はてしない闘争を必要とする（あるいは希求する）論理だったと思う。人と人との闘争こそが歴史を前進させる力であり、歴史を創造するには

たえず大量の「階級敵人」製造をしなければならない——毛沢東思想の根幹は、これだったと思う。これだけ多くの人を苦しめ死に至らしめた思想家が、ほかにいたのだろうか。私は、中国の民衆が味わってきた恐怖と苦痛の深さを思った。あれは、何のためだったのか。（同）

これまで引用してきたさまざまな文章のなかで、作者の視点はすでに理解できたろうと思う。つまり、ところどころに、これまでの歴史全体を視野に入れながら、毛沢東批判のニュアンスを含めて書き綴っている。この作者の毛沢東のとらえ様を追ってみる。

作者自身が初めて疑問を抱いたのが、すでに引用したように、毛沢東のポスターの件で恐れを抱き、父、張守愚の扱われようを目撃した時点であり、その上で毛沢東に対する信頼がゆるぎはじめたのである。だがこの信頼は一時的に復活する。農村へ下放されていたときである。

林彪という名前さえ知らぬ農民にとっては何の意味もない情報だったが、私には目くらむようなうれしいニュースだった。毛沢東その人を疑うことを思いつかなかった私は、林彪こそ文化大革命の元凶だと考えていた。毛沢東と林彪が決裂したということは、毛沢東が文化大革命を否定したということだ、これで苦痛も破壊もやっと終わる——そう思った。林彪の失脚を見て、私はある意味で毛沢東に対する信頼をあらたにした。私と同じように楽観的な見通しを抱いた人は多かった。

（第二十四章「どうか、ぼくの謝罪を聞いて下さい」）

この時点では作者は、未だ毛沢東に決定的な不信を抱いていない。ところが、父親は毛沢東よりも党そのものを考えていた。自己が置かれている状況を見つめながら、自らの来し方に思いをよせ、持ち前の律儀さで自己点検をし、運命について考え、息子に聞かせる。「思想改造」のために送られた辺境の地で得た結論である。

「たぶん、父さんはもうあまり長くないような気がする。こうして命があるのが不思議なくらいだ。父が死を口にするのをそれまで一度も聞いたことのなかった京明は、びっくりしてなんとか父を元気づけようとした。しかし父は、ゆっくりと話をつづけた。「ときどき自分に聞いてみるんだ。死ぬのがこわいか、と。」

こわくはない。こんなふうにして生きているほうが、よっぽどつらい。しかも、これがいつまで続くのか、終わりも見えない。ときどき、父さんも弱気になることがある。安寧河のほとりに立って、さあ、ここで飛びこめばすべておしまいに行ける、と思うこともある。だが、いけない、そんなことをしてはいけない、と自分に言いかけせるんだ。ここで汚名を晴らさずに死んだら、おまえたちにいつまでも苦勞がついてまわることになるから……。このごろ、いろんなことを考えるんだ。父さんは、ひどい子供時代を送った。世の中は、不正にまみれていた。共産党にはいったのは、公正な世の中を作りたかったからだ。それ以来ずっと、全力をつくしてやってきた。だが、それが人民の役に立ったか？ 自分のためになったか？ 家族のみんなを破滅の淵にひきずりこんで、何のための苦勞だったのか。因果応報というからには、悪い死にざまをする奴はどこかでやましいことをしているにちがいない。父さんは、自分がいままでしてきたことを一所懸命思いたそうとしているんだ。たしかに、人を処刑する命令は出した……」。

そう言って父は、若いころに自分が死刑執行命令に署名したひとつひとつの案件について、処刑された人物の名前と罪状をあげていった。朝陽で土地改革を進めていたころの悪覇（オペア 残忍な悪徳地主）。宜賓の土匪の頭目。「だが、あいつらはほんとうの悪人だ。神様だって、死刑を言い渡したにちがいない。だったら、何の報いでこんな目にあわなければならないんだろう？」。

長い沈黙のあとで、父は言った。「もし父さんがこんなふうにして死んだら、もう共産党を信じることはないぞ」。(同)

言うまでもなく、四川省の高級幹部である守愚は自己の正当性を信じて疑わなかったのである。毛沢東の率いた、そして毛沢東に屈伏し同調した黨員たちをも含めた共産党に裏切られたという認識である。

毛沢東に対する懐疑という点では、作者も同様に抱いていたことはすでに触れた。そして共産主義体制をとっている中国という国家にも疑いの念を直観的に抱いたのである。父母が捕らわれているときに迎えた十六歳の誕生日、そして文化大革命のさなかで、成都での造反派どうしの抗争の銃撃戦の音を聞いていた。

夜になった。あちこちで銃声がしていた。造反派の拡声器が、血も凍るようなおそろしい文句をがなり立

てていた。そんな音を聞きながら、ベットに横たわっていた私に、その夜、人生の転機が訪れた。それまでずっと、私は自分が社会主義中国という天国に住んでいるのだと教えられ、それを信じてきた。資本主義の世界は地獄だと教えられ、それを信じてきた。けれどもいま、私の心に疑問があった。これを天国と呼ぶなら、何を地獄と言うのか？ これ以上ひどい世界がほんとうにあるのかどうか、自分の目でたしかめてみたいと思った。生まれてはじめて、私ははっきりと自分の住んでいる国の体制がいやだと思った。どこかちがう世界へ行きたいと思った。

(第二十一章「雪中に炭を送る」)

やがてアメリカのニクソン大統領の訪中のおかげで、国内にいてアメリカのことをある程度知ることができるようになった。だからこの思いが、西側の世界に憧れさせ、大学で英語を学ぶことを決意させた。

私は、友だちとよく西側世界のことを話した。このころにはもう、西側はすばらしいにちがいないと思うようになっていた。逆説的だが、こうした考えを最初に私の頭に植えたのは、共産主義体制と毛沢東その人であった。何年も前から、毛沢東は私の好きなものをことごとく西側の害毒だと非難してきた。きれいな洋服、花、本、娯楽、礼儀、やさしさ、自律、慈悲、親切、自由、残虐な行為や暴力に対する嫌悪、「階級仇恨」よりも愛情に共感する心、人命の尊重、干渉されないこと、専門分野に秀でること。西側にあこがれない人なんて、いるのかしら？ それが私の正直な気もちだった。

(第二十六章「外国人の尻を嗅いで芳香と言うに等しい」)

さらには西側の世界では、反対意見さえも許容する寛容さがあることを知り、抗議を許しさえもすることを知る。そして「ニューズウィーク」を読んで決定的なことを知る。

一九七四年秋のある日、ひどく人目をはばかるようすで、友人が「ニューズウィーク」を見せてくれた。毛沢東と江青の写真がのっていた。友人は英語が読めないで、記事に何と書いてあるか教えてほしいと言って雑誌を持って来たのだった。本物の外国の雑誌を見るのは、このときがはじめてだった。記事の中の一文が、いなずまのように私を打った。そこには、江青が毛沢東の「目であり、耳であり、声である」と書い

であった。そのときまで、私は江青のしていることと夫である毛沢東との間に明白なつながりがあるのかどうかなど、考えないようにしてきた。だが、これではっきりわかった。私の意識のなかでなんとなくぼやけていた毛沢東の姿が、ついにはっきりと像を結んだ。破壊と迫害の背後には、毛沢東がいたのだ。毛沢東のうしろだてがなければ、江青とその二流の取り巻き連中など、一日ももたなかったのだ。生まれてはじめて、私の精神はまっこうから毛沢東に挑もうと武者ぶるいしていた。(同)

さらに作者は、この思いを強く奮い立たせる象徴的なものときごとに出会う。父の死後、弟の京明と旅に出て、共産党の重大な会議がときどき開かれる景勝の地、廬山を訪れた。つまり「革命伝統教育聖地」である。美しい風景に見とれて三十六枚どりの最後の一枚を撮影した。

そのとたん、どこからともなく男があらわれて、低いけれども有無を言わせぬさぐみのある声で、カメラをこちらへ渡しなさい、と言った。私服だったが、ピストルを持っているのがわかった。男はカメラを開け、三十六コマのフィルムぜんぶを日の光にさらした。そして、地面に吸いこまれてもしたかのように忽然と姿を消した。これは毛主席の夏の別荘なんですよ、と近くにいた観光客が小声で教えてくれた。私のなかで、毛沢東に対するあらたな反感が頭をもたげた。毛沢東の特権そのものに対してというより、人民にはわずかな快楽を望むことさえ罪であると言っておきながら自分はこの山荘で奢侈をむさぼっている、その偽善に腹が立ったのだ。

(第二十七章「これを天国と呼ぶなら、何を地獄と言うのか」)

作者、張戎がこの『ワイルド・スワン』を著したのは、この極めて個人的な思いからの出発点であろう。だが、それも私的な思いの連なりではなく著作自身の成長過程で重要に関わった毛沢東との訣別であり、叩きこまれた毛沢東思想の切り離しである。作者は毛沢東を次のように決めつける。

毛沢東の思想は、あるいは人格の延長だったのかもしれない。私の見るところ、毛沢東は生来争いを好む性格で、しかも争いを大きくあおる才能にたけていた。嫉妬や怨恨といった人間の醜悪な本性をじつにたくみに把握し、自分の目的に合わせて利用する術を心得ていた。毛沢東は、人民がたがいに憎みあうようし

むけることによって国を統治した。ほかの独裁政権下では専門の弾圧組織がやるようなことを、憎みあう人民にやらせた。憎しみという感情をうまくあやつって、人民そのものを独裁の究極的な武器に仕立てたのである。だから、毛沢東の中国にはKGBのような弾圧組織が存在しなかった。必要なかったのだ。毛沢東は、人間のもっとも醜い本性を引き出して大きく育てた。そうやって、倫理も正義もない憎悪だけの社会を作りあげた。しかし、一般の民衆ひとりひとりにどこまで責任を問えるのかとなると、私にはよくわからなかった。

毛沢東のもうひとつの特徴は、無知の礼賛だ。毛沢東は、中国社会の大勢を占める無学文盲の民にとって一握りの知識階級が格好のえじきになることを、ちゃんと計算していた。毛沢東は正規の学校教育を憎み、教育を受けた人間を憎んでいた。また、誇大妄想狂で、中国文明を築きあげた古今の優れた才能を蔑視していた。さらに、建築、美術、音楽など自分に理解できない分野には、まるっきり価値を認めなかった。そして結局、中国の文化遺産をほとんど破壊してしまった。毛沢東は残忍な社会を作りあげただけでなく、輝かしい過去の文化遺産まで否定し破壊して、醜いだけの中国を残していったのである。

(第二十八章 翼をこの手に)

IV 知の礼賛を

この書『ワイルド・スワン』を自分なりに整理し、稿を書き続けるにしたがって天皇制を利用した軍国主義の日本を考えた。そればかりではない。ドイツのナチズム、イタリアのファシズム、そしてヴェトナム戦争時のアメリカを思い浮かべた。さらに連合赤軍のリンチ、オウム真理教のことなども思考作業のうちに入ってきた。むろんこれらについて精密に検証する必要があるだろう。だが、権力＝暴力とするとき、作者張戎の好む「やさしさ」はその対極に位置づけられる。戦争がこの権力＝暴力の衝突であることは論証する必要はあるまい。戦争時に「やさしさ」が吹き飛ばされる、むしろ否定される。この権力を手に入れるときにも同じく「やさしさ」は無用である。そして、権力を維持するにしても同様だ。暴力装置を保有することで人々に畏怖を与えるか、もしくは暴力を用いる。毛沢東が革命戦争によって、中国の封建社会と外国支配のくびきから人々を解放したことは評価できよう。そして新しい試みとしての独自の社会主義政権を維持するために、また

外国勢力による革命転覆を防ぐための体制づくりや思想を国民に学ばせようとしたのは理解できる。そしてソ連のKGBのような秘密警察を重用せずに国民の相互の監視を採用したのも理解できる。だがこれは日本の隣組制度が強められることで相互監視が行われた第二次大戦以前の「非国民」の発想と同じである。

作者張戎が毛沢東は無知を礼賛しているとした。情報の入らない状態、考えようにもその材料がない状態、そして考える力さえ奪われた状態、つまりこれらの状態に人々をおくことが、苛酷な肉体労働のみが日々の生活である農村での「思想改造」である。この状態はこれまでの人間の歴史のなかで大多数の人間がおかれていた状態であり、まさしく被支配者の位置である。

とすると、作者の父、張守愚はこの毛沢東とは対極に位置づけることができよう。無知蒙昧なる人間、情動で自らの行動を突き動かす人間が、彼、守愚を迫害してはならない。この守愚のような知性ある人間を、無知なる人間をして迫害せし

める人間は否定されねばならない。

人間は、考えることを与えられている動物である。考える力を持っているがゆえに人間である。毛沢東思想が、作者の指摘するとおりのものである限り、おそらくは今後の中国のみならず、すべての社会に通用しないであろう。情報を手に入れる手段を人々は持っているし、多くの人々が知ることの重要性を知っているし、教育の大切さを（中国では、とりあえず生活の手段としてとらえているが）知っているから。そして第二の毛沢東は出現することはあり得ないであろうし、再度、文化革命のような嵐は吹き荒れることはないだろう。人間が「知」を保有している限り。

この「知」の重要性、大切さを、そして人間にとってかけがえのないものであることを表現しているこの作品は、テーマを普遍化し得たという点で芸術性の一端をになっている。

（ささき とおる 教授）

（1995. 7. 6. 受理）